





突然いなくなってしまうってごめんなさい。すごく身勝手だとは思いましたが、しばらくあなたと距離を置く必要があったのだと思います。

もしかしたらすでにあなたは気づいているかもしれませんが、私にはずいぶん前から、あなたとは別にお付き合いしている人がいました。けれどもそれは、誓って恋愛関係ではありません。

それはただの、身体だけの関係でした。

どうか信じてほしいのですが、私はあなたを裏切ってやろう、浮気してやろうという気はまったくありませんでした。私もまったく想像していなかったことだったのです。相手の人は、ただ仕事上で知り合った、会社の取引先の人です。あなたとは全然違う人で、ただの知人以上の関心は少しも抱いていませんでした。

ある平日に、向こうの会社で夜遅くまで打ち合わせが続き
ました。すっかり暗くなった帰り道で、先ほどまで打ち合
わせをしていたその人と偶然はち合わせました。

わざわざ出向いてきた私を労う意味で、彼は近くで軽く飲
まないかと言いました。

私は疲れていましたが、仕事の付き合いでもあるし、晩御
飯代が浮くということで（その日はあなたも遅くなって、
一緒にご飯を食べられない日だったと思います）、少しだ
け付き合いことにしました。

私たちは近くの綺麗なバーに入って、カウンターに座りま
した。知っての通り私はお酒を飲めないので、ノンアルコ
ールドリンクを片手に、しばらくただ仕事の話をしていま
した。

お店は明るい雰囲気だし、その人も私を口説こうとかいう
そぶりは一切ありませんでした。

彼は自分が今取り組んでいる仕事の話に熱心をしていまし
た。

不意に彼の手が私の肩に軽くぶつかりました。

そのときに、すべてがおかしくなりました。

身体の芯が熱く重たくなり、服の中がじっとりと汗ばんできました。お酒は一滴だって飲んでいません。

彼は私の様子を見て少し驚いているようでしたが、私自身がそれ以上に動揺していました。

体調が悪いのとは明らかに違いました。

何かどろどろとした溶岩流のようなものが、身体の下のほうから昇ってこようとしている感じでした。

椅子にまっすぐ座ることもおぼつきませんでした。

今ふりかえてみれば、湧き上がってくる強烈な性欲と呼ぶ以外にないものを、私はそのとき生まれてはじめて感じたのです。

その瞬間をさかいに、私たちの会話は途切れはじめました。

たどたどしいやりとりの間、私はずっとその感覚と格闘して、しだいに、どうしてもこの人と寝たいという考えで頭がいっぱいになりました。

彼が支払いをして、私たちはバーを出ました。

夜風が涼しくて、私はほとんどささやくように、少し散歩がしたいと言いました。

彼にはそれがはっきり聞こえていました。

私は方角もわからず歩き出しました。

いいえ、本当はそっちに繁華街があることはわかっていました。

私たちは一言も言葉を交わさないまま、しばらく歩きました。

そして一番最初に見えたホテルに入り、そこで食べるように

セックスしました。

あなたにこんな話をするのは、本当はすべきことではない
かもしれません。けれども私はあの日からまったく別の人
間になったのです。

私はそこで、信じられないほどの快楽をその夜に経験した
のです。

彼が部屋を予約している間、エレベーターに乗っている
間、今にも噴きこぼれそうな欲望を抑えて、私はじっと立
って待っていました。

部屋に入ってドアの鍵がガチャンと閉まった音を聞いた瞬
間、私はその場で、彼が何か言おうとしたのを無視して、
靴も服も乱雑に脱ぎ捨てました。

あなたがいつも褒めてくれた私の白い肌と、人よりは少し
大きめの胸をブラが持ち上げてつくっている谷間の影に彼
の目が走って、そこで彼が、私を自分のものにすることを
決めたのがわかりました。



私たちは強く抱き合っ、お互いに舌を絡ませ身体をまさぐりあいながら、もつれるようにベッドに倒れこみました。

彼は私の身体を、彼のしたいようにしました。

残った服をぜんぶ剥ぎ取って、ベッドの外に捨てました。

私の身体の好きなところを好きなだけ撫でて、揉んで、舐めまわしました。理性を失った私は彼の背中に爪を立てて、ずっと叫んでいました。ほとんど娼婦みたいに。

私たちはどろどろのぐちゃぐちゃになるまで交わりつづけました。その状況を詳細に思い出すことが私にはできません。おぼろげに覚えているだけです。

ひたすら天井を見つめながら、気でも狂ったみたいに彼の上で腰を振りました。汗だくになった私の胸が卑猥に跳ねつづけているのを下から眺められているのがわかって、私はあまりに恥ずかしくて彼の顔を見れませんでした。ひざまずいて、背中を見下ろされ腰とお尻を掴まれて、後ろから激しく攻めたてられながら、今まで使ったことのない恥ずかしい言葉をいっぱい叫びました。



私は人間ではなくなっていました。ケダモノみたいにセックスしまくって、シーツにおかまいなくよだれを垂らし、何度も気を失いかけてました。

最後にシャワーを浴びて着替えました。

部屋の隅に放り出していた服はどれも乾いたままで、その奇跡に私は安堵しました。あなたに疑われずに済む、と思ったのです。

ここに至って久しぶりに、私はあなたのことが頭によぎりました。スマホを確認したところ通知はなく、あなたが私を信頼してくれていると感じました。

すると彼が私の肩を抱いて、それまでとは違う優しいキスを私の唇にしました。

仕事とは別の連絡先を交換して、私たちは別れました。

